「過ぎ去ろうとしない過去」

－書かれはしたが、行われなかった講演－

エルンスト・ノルテ

出典

原典 : Piper Verlag (1987) "Historiker-"Streit": Die Dokumentation der Kontroverse um die Einzigartigkeit der nationalsozialistischen Judenvernichtung", München , Piper

翻訳 : Piper 社[編](1995)『過ぎ去ろうとしない過去 : ナチズムとドイツ歴史家論争』（徳永恂／清水多吉／三島憲一／他訳）人文書院、p.39-p.49

1923 年生まれのエルンスト・ノルテ教授は、『ファシズムとその時代 Der Faschismus in seiner Epoche 』(1963)によってナチズムに関する歴史家として有名になり、1973 年から 1991 年までベルリン自由大学の教授であった。彼が歴史家の間を超えて一般の人々に知られるようになったのは、1986 年の「歴史家論争」によってである。ここに掲載された論文は、ユルゲン・ハーバーマスの批判の中心対象となったものである。

なお、以下の抜粋の頁は人文書院版の翻訳頁数に対応している。レポートで引用する場合は、レポート末尾の文献表に

ノルテ(1987=1995) 「過ぎ去ろうとしない過去」（Piper 社[編](1995)『過ぎ去ろうとしない過去 : ナチズムとドイツ歴史家論争』（徳永恂他訳）人文書院、p.39-p.49）

と記し、レポート本文中の引用箇所の後に、例えば

(ノルテ 1987: 39)

というように出典箇所を明示することを忘れないように。

「過ぎ去ろうとしない過去」

－書かれはしたが、行われなかった講演－

エルンスト・ノルテ

「過ぎ去ろうとしない過去」とは、もっぱらドイツ人の、あるいはドイツのナチズムの過去のことである。普通なら、いかなる過去も過ぎ去ってゆく。過ぎ去らないというのは、何かまったく例外的なことであるに違いない。この表題が含意しているのは、こうした主張である。なお、過去が普通に過ぎ去ってゆくといっても、それは消え去るということではない。例えば、ナポレオン一世の時代は、歴史的な研究において繰り返し現在化される。アウグスティヌスの古典的著作もまたしかりである。だがこうした過去は、明らかに、それらがかつての同時代人に対してもっていた迫真性を失っている。まさにそれだからこそ、こうした過去は歴史家の手に委ねられる。それに反して、ナチズムの過去は――最近、ヘルマン・リュッベが指摘した通り――いつの間にか消え去る、あるいは力が弱まっていくといった過程をとらない。それどころかますます生き生きとし、力強くなっているようにさえ思われる。とはいえ、それは模範としてではなく、悪しき事例としてであり、まさしく現在として立ちはだかる過去、裁きの剣のように現代の頭上に吊り下がっている過去としてなのだ。

白ー黒図式

これにはもっともな理由がある。西ドイツと西側社会が一般に「福祉社会」への発展をはっきりと示すようになるや、戦争における犠牲的精神をともなった第三帝国のイメージは、ますます奇異なものになってくる。第三帝国のスローガンである「バターの代わりに大砲を」、エッダからの引用である「われらの死は祝福されるべきものとならん」などは、学園祭のコーラスで声高に歌われたものだったからである。今日では、すべての人が信条的な平和主義者である。だが、彼らの誰もがナチズムの好戦性について安全な距離をおいて観察することができないでいる。というのも、誰もが、アメリカとソ連が年々費やす軍事費は、ヒトラーが一九三三年から一九三九年にかけてつぎ込んだ軍事費よりはるかに膨大なものであることを知っているからだ。このように不安の念が残り、この不安の念が現存の複雑ではっきりしない敵より、むしろ一義的ではっきりした敵を告発するようにさせるのだ。

フェミニズムにも同じようなことが言える。ナチズムのもとでは「男性優位の幻想」はまだそれなりに刺激的な自己意識に満たされていた。しかし現在ではこの幻想は否定され、押し隠されている。したがってナチズムは、男性優位幻想が最新の紛れもない姿で現れているので、当面の敵ということになる。西ドイツが国際政治の中で中規模国家としての役割を果たしうるのがせいぜいだということがはっきりしてくるにつれて、ヒトラーの「世界支配」という要求は、ますます途方もないものに思われてくる。だが西ドイツが「無害であること」を保証されているわけではない。そして西ドイツが第三次世界大戦

の原因にはならないまでも、そのきっかけになるのではないかという懸念は、多くの場面で現実的なのだ。しかし、他の何にもまして、あの「最終解決」の記憶が過去を過ぎ去らないものにしている。というのも、西ドイツが、立法を通じて、人道的な諸国家の前衛に仲間入りするようになれば、それだけますます幾百万もの人間を流れ作業のようなやり方で抹殺するという途方もないことが、理解しにくくなってきているからである。とはいえ、ここでも疑いが残る。多くのドイツ人がそうであるように、多くの外国人もまた「法的国民」と「実際の国民」とが同一であるとは信じていなかったし、今も信じているわけではない。

だが、過去が過ぎ去ろうとしないことに不快の念を表わし、もう「終わり」にして、ドイツの過去を原則的にもはや他の国の過去と異ならないものにしたいと思っているのは、果たして日常生活のなかの「実際のドイツ国民」の頑迷さだけなのだろうか。むしろ、ナチズムと絶えず「対決」しようとする動きに対して、いわば防壁をめぐらそうとしてきた議論や疑問の多くのなかに、正当なものの核心が秘められていたとは言えないか。私は、私の見解からすれば決定的なものである「誤り」を概念化するために、こうした議論や疑問のいくらかを引き合いに出してみる。そして、「終わり」にすることとも違い、再三再四喚起されてきた「克服」とも違う過去との「対決」の輪郭を描いてみたい。

「利害関心」〔ハーバーマスの有名な著書『認識と関心』で流布した、批判的反省派が用いる概念〕について多くのことを、極めて否定的なニュアンスを込めて語っているはずの人たちが、あの過ぎ去らない過去の場合にも利害関心が働いていた、あるいは今も働いているのではないかという問いを認めようとしない。例えば、「父親」たちに対して、昔からの古い闘争をいどんでいる新しい世代には利害関心が働いているのではないか、あるいは、迫害された人々とその子孫が永く特別に取扱われ、特権化されていることにも同じことが言えるのではないか、と

いった疑問を認めようとしないわけだ。

「ドイツ人の罪」について論及することは、ナチスの主要論拠だった「ユダヤ人の罪」について語ることと類似性を持っていることを、われわれはあまりにも故意に見過ごしてきたのではないか。ドイツ人側からなされる「ドイツ人」への有罪宣告は、誠実なものではない。というのも、告発者は自分自身と自分が代表をつとめる集団を除外しようとしており、それでいて心の底ではかつての敵に決定的な一撃を加えたいと思っているからである。

われわれの注意が「最終解決」にばかり向けられてきたため、ナチ時代の重大な諸事実はなおざりにされてきている。例えば、「生きるに値しない生命」の安楽死、ロシアの戦時捕虜の取り扱いといった諸事実がそれである。とりわけ現代の決定的な諸問題例えば「堕胎」の性格づけの問題、あるいは昨日のベトナム、今日のアフガニスタンで現に存在する「民族殺戮」の問題はまったくなおざりにされてしまっている。

これら二系列の議論 ── その一方である「ドイツ人の罪」の方が前面に出ているが、しかしまだ完全に浸透したわけではない ── の併存していることが、パラドックスともグロテスクとも言える状況をもたらしたのだ。

ユダヤ人協会の代表者たちのある要求に対して、西ドイツ議会議員が軽卒な発言をしたり、ある地方政治家がうっかり趣味の悪いことを口走ったりしたことが、「反ユダヤ主義」の兆候だと誇張されている。本物の「反ユダヤ主義」、決してナチ的なものではないワイマール時代の「反ユダヤ主義」の記憶は、まるで消え去ってしまったかのようだ。そして同じ時間に、テレビではユダヤ人監督による感動的なドキュメンタリー映画『ショアー』が放映されている。しかも、この監督は、死の収容所のナチスの

SS〔親衛隊〕のメンバーもまた彼らなりに犠牲者であったのかもしれないし、他方ではナチズムの犠牲者であったポーランド人のあいだに危険な伝染性をもった反ユダヤ主義が蔓延していたことを、いくつかの箇所で明らかにしている。

アメリカ大統領〔レーガン〕のビットブルク軍人墓地訪問は、なるほど非常な感情的議論をひき起こした。しかし、「相殺の勘定書」と非難されるのを怖れ、調停を怖がる気持ちを持つということは、次のような単純な問題を考えもしないのと同じことである。つまり、もしも一九五三年の時点で当時のドイツ連邦共和国首相が、アーリントン軍人墓地〔アメリカ合衆国ヴァージニア州北東部アーリントン軍にある国立墓地〕の無名戦士の墓に詣でるのを拒否し、しかもその際に、そこにはドイツの民間人に対するテロ攻撃に参加した連中も眠っているからだという理由を持ち出したら、どういうことになっていたか、という問いを無視することである。

歴史家にとって、あらゆる過去にあてはまる単純な規則が無効になるように思われる事態こそが、過去が「過ぎ去ろうとしない」ことからくる最も嘆かわしい帰結である。すなわち、あらゆる過去はますますその複雑な相のもとに把握されねばならないとか、過去をつなぎとめている連関がだんだんと見えるようになってくるとか、争いあっている同時代者の〔単純な〕白-黒図式はしだいに修正されていくとか、以前の説明は再検討に付されるべきだとかのような単純な規則、それが無効になる事態がそうである。

しかしながら、こうした規則は、第三帝国に適用されると、「国民教育上危険」であるように思われている。それはヒトラーの正当化になりはしまいか、少なくとも、「ドイツ人の無罪弁明」になりはしまいかというのである。そうした規則を第三帝国に適用することによって、ドイツ人の大多数が少なくとも一九三五年から一九三九年にかけてそうしたように、再び第三帝国にアイデンティティーを見い出

す可能性が、また歴史によって負わされた教訓を学ばない可能性が増大するとでも言うのだろうか。

このような疑問に対しては、簡潔、明瞭に答えることが出来る。いかなるドイツ人もヒトラーを正当化しようとは思わない。それは一九四五年三月にドイツ国民に玉砕命令が出されたからというだけではないはずである。ドイツ人が歴史から教訓を引き出すのを保証してくれるのは、歴史家やジャーナリストではなく、権力関係の完全な変化、二度にわたる大いなる敗戦の眼にみえる帰結によってなのだ。勿論、ドイツ人は今もって誤った教訓を引き出すこともありうる。だが、そういったことが起こりうるのも、新しい、おそらく「反ファシスト的」であるかもしれない歩みのなかでだけ考えられるのである。

論争の次元を超えて、第三帝国と総統のもっと客観的な像を描こうとする努力がなかったわけではないことは、本当である。ヨアヒム・フェストとセバスチャン・ハフナーの名をあげれば十分だろう。客観的な像を描くとはいえ、二人ともまず第一に「ドイツ内部の視点」を視野に入れていた。以下で、私は若干の問題とキーワードを手掛かりとして、この過去を「〔他の過去と〕同等に取り扱う」べきパースペクティブ、過去をどう見るべきかというパースペクティブを示そうと思う。過去を「同等に取り扱う」というのは、哲学と歴史学の原理的要請だが、しかしそれは、過去を同一視するのではなく、まさにその差異をはっきりさせるためである。

事態を明らかにするキーワード

マックス・エルビン・フォン・ショイブナー・リヒターは、一九一五年、ドイツ領事としてエルサレ

ムに赴任していた。彼は後にヒトラーの親密な協力者の一人となり、やがて一九二三年一一月、〔ミュンヘン一揆にあたって〕州軍司令部へのデモに際して銃弾に倒れた人物である。彼は、エルサレムの地で、二〇世紀の民族大量殺戮の始まりであるアルメニア人追放の目撃者となった。彼はトルコ当局に反対する労をいとわなかったし、一九三八年に出された彼についての伝記は、次のような言葉で終わっている。「ベルリンからの厳しい直接の警告にさえ耳をかさないトルコ宮廷の抹殺の意志に抵抗するためには、解き放たれたクルド人の狼のような野蛮さに抵抗するためには、ヨーロッパ文明とははるかにかけ離れたアジア的な仕方で、アジアの一民族が他の民族と対決し合った結果、途方もない迅速さで展開されたカタストロフィーに抵抗するためには、一握りの人間の努力は何ほどのものであっただろう」と。

ショイブナー・リヒターが、アルフレッド・ローゼンベルクに代わって東方占領地区の担当大臣に任命されていたなら、彼が何を為し、何をしなかったであろうかは、誰にもわからない。だが、それは彼とローゼンベルクやヒムラーとの間に、いやそれどころか彼とヒトラー自身との間に根本的な差異があるということにはならないだろう。だが、そこで次のように問わざるをえない。つまり、自分たちが目の当りにした民族殺戮を「アジア的」だと感じた男たちに、もっと恐ろしい本性からなる民族殺戮のイニシアチブを取らせるきっかけとなったのは、一体何であったのか、と。事態を明らかにするキーワードがいくつか存在する。その一つは以下のものである。

ヒトラーが、一九四三年二月一日、スターリングラードにおけるドイツ第六軍降伏の報告を受け取ったとき、彼は作戦会議の席上、捕虜になった将校の幾人かはソビエトのプロパガンダ活動をするだろうと、直ちに予言して言った。「諸君ら想像してもみたまえ。そやつ〔そのような将校〕はモスクワに入る。そして『ネズミかご』を想像してみるがいい。そやつは何にでも同意する。そやつは告白し、声明

を出すだろう……」。

解説者たちは、「ネズミかご」とはルビヤンカ刑務所のことだと注釈している。私はそれはそうではないと考える。

ジョージ・オーウェルの『一九八四年』に、主人公ウインストン・スミスが「偉大な兄弟」の秘密警察による長い拷問の末、ついに彼の婚約者を否認し、そうすることによって自分の人間的尊厳を放棄することを強いられる経緯が語られている。空腹のために半ば気のふれたネズミの入っているかごが、彼の目の前に運ばれる。尋問官はこのかごの鍵を開けると脅迫する。そこでウインストン・スミスは屈服してしまう。この話はオーウェルの作り話ではない。それは、ロシアの内戦に関する反ボルシェビズム文学の至る所で見い出される。とりわけ信頼のおける社会主義者メルグノウの著作においてしかりである。この話は、「中国のチェーカ〔チェーカは反革命に対する闘争のための全ロシア委員会〕」をもとにしているのである。

収容所群島とアウシュヴィッツ

ナチズムを扱ってきた文献の顕著な欠陥は、ナチスが後に犯すことになるすべてのことがら、すなわち大量移送や大量銃殺、拷問、死の収容所、もっぱら客観的基準にしたがってなされる全集団の根絶、「敵」と見なされるべき幾百万の無辜の人間にたいする公然たる抹殺の要求といったことがらが、ガス室での抹殺という技術的なプロセスを唯一の例外として、すでに二〇年代初頭の多くの文献に相当量書き残されているという事実を、知らないか、あるいは認めようとしない点にある。

これらの報告の多くが誇張されすぎているということは、ありうることだ。「白色テロル」の方としてもまた、そのプログラムの枠組に、「ブルジョアジーの根絶」という〔赤色テロルの〕要請と張り合う意図などなかったにせよ、恐るべき行為を犯したということに間違いはない。だが、にもかかわらず、以下のように問うことは許されるし、実際避けがたいものと思われる。すなわち、ナチスが、そしてヒトラーが「アジア的」蛮行に及んだのは、もしかするとひとえに、自分たちや自分たちの同胞を、「アジア的」蛮行の潜在的もしくは現実的な犠牲者と見なしていたからではないか。「収容所群島」の方がアウシュヴィッツよりもいっそう始原的であったのではないか。ボルシェビキによる階級殺戮は、ナチズムの「人種殺戮」の論理的かつ事実的な先行者だったのではないか。ヒトラーの極秘の行為は、まさしく彼が「ネズミかご」のことを忘れはしなかったということからも説明されるべきではないか。アウシュヴィッツは、そもそも、過ぎ去ろうとしない過去に起因していたのだろうか、といった問いがそれである。

こうした問いを尋ねるために、忘れられたメルグノウの小冊子を読む必要はない。しかし、われわれはこうした問いを提起するのを恐れている。事実、私もまた長い間恐れてきた。こうした問いは、好戦的反共テーゼあるいは冷戦の産物と見なされている。実際、こうした問いは、常により限定された問題設定を選ばなければならない個別学問には、確かに適したものとは言えない。だが、それらの問いは単純な真理にもとづいている。意図的に真理を迂回するのは、道徳的には理由があるかもしれないが、学問の精神には反する。

我々がこれらの事実や問いの前でとどまり、それらをより大きなコンテクスト例えば、産業革命とともに始まったヨーロッパ史に見られる、常に「うさんくさい者」や宿命的潮流の「主導者」をヒス

テリックに狩りたててきた、質的にどうしようもないあの亀裂の中に置いて考えてみないなら、学問の精神は失われてしまうだろう。こうした枠組の中ではじめて、どんなに比較可能であろうとも、ナチズムの生物学的な抹殺行為がボルシェビズムの企てた社会的抹殺とは質的に異なるということが、明確になってくることだろう。一つの殺人、大量殺戮の一事例は、他にも殺人の事例があるからといって「正当化」されるわけではない。だからといって、もっぱらただひとつの殺戮、大量殺戮の一事例にだけ眼を向け、因果関連がありそうなのにその事例を知ろうとしない態度は、根本的に誤りである。

この歴史を神話学者としてではなく、〔以上に述べてきたような〕本質的なコンテクストの中に置いて見ようとする人は、次のような重要な結論に到達せざるをえないだろう。つまり、もし歴史というものが、その暗愚と恐怖という外見にもかかわらず、また犯罪者たちを利するに違いないような混乱した新事態が起こりうるにせよ、後に続く世代にとって何らかの意味を持ちうるとするなら、その意味は集団主義的思考の専制から解放されることにあるはずだということである。同時に、このことは自由主義的秩序のもつあらゆる規則に断固として賛同することを意味すべきだ。〔ここでいう〕自由主義的秩序とは、行為、思考様式、伝統について批判がなされるとき、したがってまた批判があらゆる種類の政治形態や組織に向けられるとき、そのような批判を許容し、むしろ鼓舞する秩序のことである。しかしながら、そのような秩序といえども、諸個人が離れることができず、あるいはまた多大な努力を払わなければ離れられないような〔運命的〕所与の状態に対する批判は許されえないという刻印をおしておくべきだ。ユダヤ「人であること」、ロシア「人であること」、ドイツ「人であること」、小市民「であること」に対する批判がそれである。ナチズムをめぐる論争がこの種の集団主義的思考の特徴をおびている限り、そのような論争は終局的に終わりにすべきだろう。論争がそのような特徴をおびているなら、

無思想性や自己満足が蔓延するであろうことは否定しがたい。だが、そうあってはならないし、また、真理は少なくとも有効性に委ねられてはなるまい。より包括的な論争は、とりわけ最近二世紀の歴史の反省を含まざるをえないだろう。そのような論争なら、表題で問題にした過去を過去にふさわしく、「過ぎ去る」に至らしめるだろう。まさにそうすることによって、過去は過去自体を自分のものとするにちがいない。

『フランクフルター・アルゲマイネ』紙、】九八六年六月六日号

(著者注)レーマベルク討論会〔毎年フランクフルト市の市役所前広場レ:マベルクで行われる著名人を招いた討論会〕で提案された講演の題名が「過ぎ去ろうとしない過去—論争か終止符か？」であった。

(清水多吉・小野島康雄訳)